
ある田舎のB a r にて

チリドック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある田舎のBarにて

【Nコード】

N4260Y

【作者名】

チリドック

【あらすじ】

とある田舎街の片隅にひっそりと佇むバー。

一日も休むことのないこのBarは、女性バーテンダーひかりを中心に

ゆっくりjazzサウンドと共に時を重ねる。

ひかりのつくるカクテルは甘くもあり刺激的なことで知られていた。そしてなにより、彼女の持つ独特の雰囲気の人気があった。

そして今夜も、彼女が生み出すカクテルと彼女の友となる人々がやってくる。

自身のアメーバブログにも掲載中です。

カクテル1

カランカラン・・・・・・・・

店のベルが鳴る音のあとに、

「いらっしやいませ」

数メートル先のカウンターを隔てて立っていた女性に、明るい挨拶をされる。

背が高くて線の細い目鼻立ちがしっかりと整った長い黒髪を一つに束ねたきれいな人だった。

なんとなくオーラのようなものを感じた。

私なんかとは正反対の、いわゆる世間一般に言う「いい女」というたぐいの人間だ。

ゆっくり歩を進ませながらぐりと店内を見回す。

お客は3、4人しかおらずそれほど混んでいるようではなかった。

整然と並べられた丸テーブルと、その向かいにどんと構えているカウンター。

それを囲む壁際には、お洒落なインテリアと見たこともない、見るからに高そうなボトル達が出番をじつと静かに待っている。

どこかで聞いたことのあるjazzBGMがまるで空気の一部のように私の中へ染みてくる気がした。

どこに座ろうか迷っていると、バーテンダーが「よろしかったらこちらへどうぞ」

カウンターの隅に手を伸ばしてにっこりしながら促す。

明らかにこういうところが初めてだと見透かされたようで恥ずかしかった。

私は無言でそこに腰掛けると、友人に聞いて唯一知っていた

カクテル『マティーニ』を頼んだ。

今日は人生で初めての失恋をした夜。

婚約もしていたが、解消した。

短大の頃から彼と付き合って約十年。

まもなく三十を迎える女が

こんなことをいうのは笑われるだろうか？

遠距離恋愛でこれまで、五回も浮気されたが私の人生から彼が消えて

しまうことが家族を失うことと同等に思っていたから、何度も踏みとどまった。

それでもついに終わってしまったのは一言で言えば疲れたからだと思う。

多くのことが積み重なって、私の心の許容量を超えてしまったのだ。

だからけっして嫌いになったわけではない。

いまでも彼のことは好きだし、掘り下げれば掘り下げるほど涙が溢れる。

好きだけではどうにもならないこともあると思う私は『負け犬』なのだろうか・・・

マティーニを一気に飲み干して、オリーブを人差し指で前後に弄びながら

物思いにふける私の後ろ姿はなんて惨めなのだろう。

私は、壁に『お勧めカクテル』という張り紙を見つけると適当にその中から『ジンフィズ』を頼んだ。

とその時隣に座っていた男が話しかけてきた。

「あの、すみません大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

内心虚をつかれて動揺していたが平静を装って笑顔で返す。

歳は私より少し上の、落ち着いた雰囲気のある男だった。

「驚かせてしまったようですね申し訳ありません。なんだかほっとけなくて」

「・・・・・・」

これがナンパというものだろうか。

生まれてこの方こういうものには縁がなかったのどう

対処すればいいのかわからなかった。

正直いまはほっといて欲しい。

不自然な沈黙。

男は居心地悪げにグラスの液体を一気に飲み干した。

一呼吸置いてから、男は呟いた。

「実は今日、私は一人の女性に告白して見事に撃墜されてきました。もしよかったら貴女の意見を聞かせてもらえませんか？」

「・・・・・・」

言葉が見つからないとき、ジンフィズが運ばれてきた。

それをぱっと見た感じではかき氷にストローが二本突き刺さって
いてその下に

お酒が漂っているような風景だった。

ストローが二人分刺さっているのはバーテンダーのお節介かと訝しげに

彼女を見やると、すかさず彼女は氷がストローに詰まる場合が
ございますので予備ですよと答える。

なるほどと思いながら、ストローに口を付ける。

とてもおいしかったが、飲むにつれて頭が痛くなりそうだ。

と、強い視線を感じて男を見るとつい男の顔面に向けて吹き出
してしまった。

いまにも泣き出しそうな、切ない表情を浮かべていたため思わ
ずしてしまったのだ。

かぁーっと頭が熱くなる。最悪だ人生で最低の夜だと自分を呪

う。

何度も頭を下げて謝罪の言葉を祈りのように呟く。

バーテンダーがささず渡したおしぼりで顔を拭いながら、男は苦笑する。

「いえ大丈夫、大丈夫ですお気になさらず。ただもしよかったら、話だけでも

聞いていただければ嬉しいんですけど・・・」

「・・・わかりました。私でよろしければ」
静かに息を吐いて気を静める。

なんとか、これ以上男を刺激しないように終わらせよう。

と、思い愛想笑いを浮かべる。

「ありがとうございます」

男はお勧めのコニヤックを、とバーテンダーに頼んでからゆつくりと話し始める。

職場の同期で、入社から十年以上一緒に頑張ってきた女性だったらしい。

聡明で誰にでも優しく接してくれる社内のアイドル的存在だったそうだ。

男は良き友人としてまた仕事のパートナーとして彼女を良く助けた。

そして隣町に今度新しくできる支店を任せられることがこの間決まったので、

離れる前に告白したというわけだった。

しかしその彼女は、

「そんな冗談はこれっきりにしてよね」
と、笑いながら去っていったという。

ここまで話して、男ははあとため息をつく。

「どう思います？酷くないですか？」

「どう？ってそういう対象には見られないってことじゃないんですか？」

良いお友達でいられるんだしいんじゃないですか？」

「はあ、そうですね。貴女は好きな人がいますか？」

「ええ、いますよ」

男は私の婚約指輪の痕がまだ新しい左薬指をじろつと見て呟く。

私はその視線が気持ち悪く薬指を隠した。

「おつきあい長いんですか？」

私は男のその動作が酷く、異性を品定めする人間の汚い部分を見た気がして気分が悪くなった。

「十年以上でした。しかもついさつき婚約解消しましたよ！

貴方は私にこれ以上何を求めているんですか！？」

その時、彼に対して取った行動に対してしばらくの間責めることになる。

汚い物でも見るように、さらに自分も似た状況にありながら見ず知らずの人に当たっている。

酔いのせいにするほど私はまだ神経が図太くはなかった。

「え・・・あ、すみません。余計なこと言ってしまつて」

先に謝られ、私はなかばやけぎみにストローで思いつきりカクテルを飲み込む。

キーン、とかき氷の痛みが頭に走り、顔をしかめる。

手の甲に涙がしたり落ちている。酔つたようだ。

喉が震え、胸が詰まりそうなくらい熱くなる。

嗚咽を押し殺すように、私は深く静かに深呼吸した。

とその時、先ほど聞いた澄んだ明るい声色が静かに耳に入ってきた。

「お客様。あまり女の子を困らせないでくださいよ」

「え、あ・・・ほんとす、すみません」

狼狽えたように、男は答える。動揺でグラスを持つ手が震えているのか、

氷の震える音が聞こえて想像できた。

「それにまだふられたとは決まっていなくてもいいじゃないか？ 気づ

いてないだけかも」

「はあ・・・」

涙を拭い、顔を上げるとバーテンダーが男に向かい合うように立っていた。

一瞬、バーテンダーが私をちらりと見て微笑んだ。すぐに男に視線を戻すと

斜向かいの壁に張り付いている柱時計に目を向けて彼の視線を促す。

「まだ電話すれば間に合うかもしれませんよ。女の子は夜になるとちよつぱり素直になるんですからひよつとすると・・・」

「はあ・・・」

感動したように感嘆の声を漏らす男は、突然急いだように席を立つとお会計をすませる。

そして私の方に向き直って口を開く。

「本当にすみません。もしここでまた偶然お会いしたらおごらせてください！ それじゃ」

と言い捨てて颯爽と店を出て行った。

私は彼の背中を見送ることなく、カランカランというベルの音に耳を澄ませていた。

ふと、バーテンダーと目があつた。

「すみませんうるさかったですよね？」

胸元に「ひかり」とネームを付けたその女性は、グラスを磨きながら

まっすぐに私を見つめて口を開く。

「いいえそんなことはありません。それにしても男はいくつになっても可愛いですね」

「はははそうですね」

一瞬だけ、彼女の瞳に垣間見えた寂しげな光がなぜかすごく切なく感じられた。

「よころでお客様は、幸せな時間・・・結構ございましたか？」

一言一言をゆっくり丁寧に、耳元に囁くような話し方に思わず泣き出しそうになりながらもこらえてなんとか言葉に出した。「はいとても、しあわせでした」

彼女は心底嬉しそうに目を細めて、呟く。

「そうそれじゃ、そんなに悲しまなくても。笑っていればきっとそのうちもつと素敵な天使が側におりてくるかも。

ってちよつとくさいわねごめんなさい。でも本当よ？

前を見ないと暗くて何も見えないから」

顔を少し赤くして彼女は微笑んでいると、思い出したように足早にコンポの前へいつてボリウムを上げる。

リズムカルだがどこか哀愁が漂うサックスの音色が店内を充満する。

私は爪先でコツコツとカウンターをリズムを取る。

濡れた瞼をハンカチで拭いながら、音楽に私は身を委ねた。

いつのまにかグラスの中にいた氷はもうすでに、溶けていた。

ガチャ

カランカラン・・・・・・・・

「ご来店ありがとうございました。」

またのお越しを心よりお待ち申し上げます」

おわり

カクテル1（後書き）

会社の同僚女性の話を元に書いてみました。

ちなみに結末は紆余曲折ありましたがご結婚されましたw

カクテル2（前書き）

カクテル2

「ねえねえひかり。水着貸して」

「どしたのいきなり？ まさか烏龍茶で酔った訳じゃないわよね？」
ひかりはグラスを磨きながら、カウンターに頬杖を付いて微笑む幼なじみに呟いた。

ひんやりとエアコンの効いた薄暗い店内に、灰皿に横たわる一筋の煙草の煙が、

柔らかい輪郭で糸を紡ぎ暗い天井にすーっと吸い込まれていく。

灰皿の縁を人差し指でなぞりながら、一方で烏龍茶を少し飲んでから、彼女は呟く。

「違うよー来週彼と海に行くんだけどいいのないし、買うのも面倒だから。ひかりセンスいいもんね」

「んー、でもさおりにはきついんじゃない？」

ひかりは意地の悪い笑みを浮かべながら、手近に置いてあったカリーブの実を口にした。

これはひかりのよくする癖で、こうして集中力を高めるのだと友人たちにひかりは語っていた。

「意地悪言わないでよ！ 頑張るからお願い」

さおりは両手を合わせて、少しにやにやしながら言った。

（何を頑張るのよ）

そのにやけ顔を一瞥しながら、はあとひかりは胸中で呟いた。
「しかたないなあ。いいよ、もうあたしには多分必要ないからあげる」

「え、本当！？ サンキューもうマジかーわーいーいー」

「……………なんかむかつくなー」

ちよつと気恥ずかしくてそんなことを言つたが、さおりはそれを
気にもせず笑つて見せた。

と、その時

カランカラン・・・・・・・・

ベルの音のあとに、

「いらっしやいませ」

扉を閉める私の背中に、聞き覚えのある声がかけられた。

振り返ると、ぼんやりしたオレンジ色の明かりの中に一人の女
性がぼつんとたっている。

開店時刻からそれほど時間が経っていないせいとお客は、

カウンター席の右端に女一人だけ腰掛けていた。

この店を知つて、もう三年ほどになるがこの時刻に来たのは初
めだった。

そのせいかな、なんだか落ち着かない。

私はお気に入りだったカウンター席中央に腰掛けると、
すつと差し出されたおしほりで瞼を軽くふいた。

「お久しぶりですね木村様。・・・二ヶ月ぶりでしょうか」

「そうですね。ひかりさんは変わらないですね」

「いえいえ皆様から日々いただくお褒め言葉のおかげです。

毎日充実した日を過ごさせていただいております。さてご注文は、
いかがなさいますか？」

「んー、ジントニック、もらえますか？ あと鴨肉スライスしたや
つも」

バーテンダーは眼をやや細めると軽く頭を下げて、

「かしこまりました」

呟いた。

この仕草が、私は内心好きだったりする。

慎ましやかで凜としているような雰囲気のある女性は見ているだけで気持ちいい。

そんなことを思っている間に、カクテルが完成してコースターにグラスが腰掛ける。

「不躰で申し訳ありませんがなにか、お悩みでもおありですか？」
私グラスを見つめていた眼を彼女に向けた。

眼を細めて、まるで黒曜石のような美しい瞳をこちらへまっすぐとむけている。

「ん、いや」

理由は分からない、私は軽く首を振って一口飲んだ。

かすかな酸味が口の中に広がり爽やかな後味がふわりと私の脳内を揺さぶる。

（空腹にはやはり応える）

私は静かに息を吐くと、再び彼女の顔を見返した。

バーテンダーは変わらぬ様子でこちらを時々見つ、

まるで精密機械のようにグラスや氷、彼女の子供達であるボトル達を操る。

カランカラン………

「いらっしやいませ！」

4人ほどの男女が、テーブルに座った。

入り口の近くにあるトイレの隣に従業員扉があつて、

そこから若いボーイが出てきて彼等にメニューを差し出す。

その様子を、まるで自分の子供でも見るかのように暖かく彼女は見つめていた。

「あのさ、一つ意見を聞かせて欲しいんだけど・・・良い？」

「はい。私でよろしければ」

作業の手は止めずに、眼だけを私に止めてそう答えた。

・・・ BGMがアップテンポなものからしつとりと哀愁漂うものに変わる。

音楽とこの空気に後押しされて私は静かに、言葉を間違えぬよう慎重に話した。

まず自分は営業の仕事をしていて、転勤が多くせわしないこと。実家のある街に恋人を残してきたこと。

最近また隣の県にある支店へ異動になったこと。

そのあと突然恋人に別れを切り出されたこと。

恋人は私を嫌いになったわけでも、他に好きな男ができたわけでもなく

ただ別れたいと言う話だった。

自分の中では別れたくないという気持ちが強く、しかしどうすればいいのか・・・

それについて、端的に話した。

見慣れたこの女性バーテンダーは、一言も発さず耳だけを私に傾けてくれていた。

お洒落なグラスに、鮮やかな色の液体を注ぐ様子を眺めながら、自分の気持ちの断片と重ね合わせ胸が詰まりそうになった。

話を終えて目頭が熱くなった私は不意に視線をグラスを持つ自分の手に置く。

沸き上がる衝動に驚いている自分の内から、かすかに漏れた想いが手を震わせている。

（弱いな・・・）

胸中で呟くと、ふっと息を吐いて聞き手となってくれていた彼女に視線を戻す。

仕事が少し落ち着いていた様子で、彼女はまたグラスを磨く作業に

戻っていた。

視線がぴたりと合う。

「・・・それで、別れたくないんだけど。なにか良い方法ない？」

彼女は口元に柔らかな笑みを浮かべ、眼を細めると口を開いた。
「そうですね一言だけ申し上げさせていただきますと、

馬鹿なくらいロマンチックになるですね・・・

色々、お二人にしか分からない悩みもあるでしょうからあれこれと申し上げられませんが、

現実を直視しがちな私たちでもたまには、夢を見たがる習性だと思っんですけど・・・

うーんうまくいえないな。生意気いつて申し訳ありません」

女性バーテンダーは、気恥ずかしそうにコンポの所へ足早に歩いて音量を上げた。

「いや、いいよ。ありがとう」

歩いていく彼女の背中に呟く。

酔いのせいか感傷的になったせいか、突然眩暈を覚えて目頭を押さえる。

その隙間から、涙が滲み出てきたことに驚く。

咳払いをしてグラスの液体を一気に飲み干すと、気恥ずかしさからか私は苦笑した。

その時、私は『もう終わろう』と心に決めた。

そこまで彼女を追いつめた自分と決別するためにも、

それでお互いが将来別々の道で幸せになることができればそれで良いと思えたからだ。

淡く熱く沸き上がるこの気持ちを意識のそこにゆっくり沈めながら、バーテンダーに呟いた。

「コットンフラワーを」

「はい、かしこまりました」

相変わらず静かで凜とした物腰で軽く会釈をして、彼女は微笑んだ。

その微笑みが失った女性とだぶって、私はまた眩暈を覚えた。

ガチャ

カランカラン・・・・・・・・

「ありがとうございます。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます」

・・・・・・・・

「大丈夫？」

「ん、なにが？　なんか飲む？」

「じゃあ、水ちょうだい」

「ほーい」

ひかりはきょとんと仕事とは180度違う間の抜けたトーンで答えると、機械的に素早く水を渡す。

すでに日付は代わり、閉店まで小一時間ほどだがこの悪友は来店したときから

まったく変わった様子もなくカウンターの片隅に腰掛けている。

お客も、さおり一人だけで今夜も終わりだという影が佇んでいるようだ。

ひかりは映画音楽も良く聴きいまは「シエルブルの雨傘」の流麗な音楽が

薄暗い店内に腰掛けていた。

ただ、さおりはその音楽がひかりのなかでの思い出の曲と直感的にわかっていた。

しかしひかりも、さおり自身も聞かれることが趣味ではないので語ることはないが、

まるで不意に見た夕焼けに感動したあと、ひどい寂寥感に襲われることに似たその感情

が淡くこみ上げているのではないかと、オリーブを加えながらグラスを磨く

友人を観察しながらそう思った。

「恋愛って、ほんとう融通が利かないわよね」

整然と並び照明によって神秘的な輝きを放つボトル達をカウンタ―越しに眺めながらさおりは呟く。

意識的にひかりを一瞥すると、ちょうど目があった。

ひかりは、軽く頷いていつものように目を細める。考え事をしている時の

この癖がさおりは内心好きだった。

嘆息混じりに、加えたオリーブを口からだすとひかりは呟いた。

「会えないときに会えないのと、話したいときに話せないこと。

そのどちらも叶えられなくなったら終わりだと言うことって言うるかな？」

さおりはこくと頷いて、

「確かに。もちろん例外を認めた上でね。そして誰もが自分たちは例外と信じて悲しむのよ」

「・・・馬鹿だよー」

くすりと、ひかりは微笑む。目を細め、さおりの瞳を覗き込むように呟いた。

最小限の会話で分かり合える友人に、ひかりは心底感謝した。

「そうねでも、そんな人生もまんざら嫌いなわけじゃないでしょ？」

「・・・もちろん」

お互い顔を見合わせて微笑む。

ひかりは磨いていたグラスに水を注いで、さおりと乾杯した。
カンッ、カラン

氷がグラスにこすれる音とガラスとガラスがこすれる音。

それぞれの音が虚しく店内に沈み、静寂がB a rの住人を包み込むとやがてB a rはまた眠りについた。

カクテル2（後書き）

これも会社の同僚の実話を元に書きました。
結末は残念でしたけど・・・

カクテル3

今月いっぱい退社する同僚の送別会帰りに、

一人で行きつけのバーに立ち寄った。

飲み会で強引に愛想笑いしていた自分を癒してやりたかった。

静かな仄暗いカウンターの隅で、それこそ店の壁に掛けられている

ライオンの頭部の隣で人間である自分を捨てて

いつそ剥製にされてかけられたい気分だった。

しかしそのささやかな幸せも、隣に座っていた女性に壊された。

突然話しかけられ、気がつくや女性に質問攻めしていた。

「彼女いるの？」

から始まり、首を横に振るところを指さしてケラケラと笑い出したり。

「あたしネクタイ結んであげるのすきなんだああ」

と言うなり、ボクの首元をいじり始めたと思ったら

首がつぶれるかと思うくらいきつくネクタイを結ばれた。

グラスを丁寧^{ていねい}に磨^ひいているバーテンダーに救^{すけ}いを求め目をやると、

微笑^{わいごう}んで頷^{うなづ}いたのみだった。

ボクはなんて非力^{ひれき}なんだろう。

もつと人に対してはつきりと言える強^{つよ}くてしつかりした男^{おとこ}だったら、

そもそもここで飲むこともなく隣の客^{きやく}に首^{くび}を締められてはいないはずだ。

我慢^{まん}も限界^{げんがい}に来ていたボクは飲みかけのグラスを

一気に飲み干^ぬして席^{せき}を立^たとうとした時も、

「女^{おんな}に振^{ふる}られたんだったらすつきりしてから帰^{かえ}ろつか! ? おねーちゃんきいたげるよー? 」

「なんで知^しってるんですか? 」

咄^{はな}嗟^さに出^でた言葉^{ことば}に失笑^{しつせう}する自分^{おのれ}、そしてポンポンと肩^{かた}を叩^{たた}かれつつ

まあまあ座^まりなといわれ気が付^{しづ}くと席^{せき}に戻^{かえ}っている自分に馬鹿^{ばか}と内心^{うちしん}で言^いってやる。

「なんとなく分かるんだよー、バーでまったり自慰行為に

浸っている人種はだいたい仕事か異性ごとだよん」

偉そうな言いぐさ。ボクは目を合わせないようにして、

また席を立つと五月蠅くなりそうなので適当に

いっぱい頼んで酔いつぶれるまで待とうと思った。

この調子ならすぐに落ちるだろう。

「あの〜リトルウィッチ、ください」

「はい、かしこまりました。ありがとうございます」

バーテンダーは丁寧に会釈すると自分と真逆の隅にいる女性客と会話を続ける。

どうやら常連らしい。

女性はこちらの動きは無視して続ける。

「んで、どうした小僧！」

ボクは突っ込まれないよう静かに嘆息した。

社内で想いを寄せつつ色々相談に乗っていた女性が、寿退社で先ほどまで送別会だった。

送別会解散の際、彼女は何の変わりもなくボクの肩を優しく叩いて、

「色々本当にお世話になって、何度言葉に出しても言い切れませんけど」

ありがとございました。お仕事一緒にしていて楽しかったです」

一礼して、二次会にボクを誘うことなく他の社員達と夜闇に消えた。

悔しかった。

この想いの原因を探ってみるとはつきりと自分の想いを言わず、結婚相手となった我が親友を紹介したのも自分だし、

その友人のプレゼンというかアピールしてやったのも自分だし。

彼女は何も悪くない。

二次会のことも明日ボクが出勤早いと知っていて気を遣ったことなのだ。

っていつかそう自分に言い聞かせている時点でやばいだろう・
・うん。

もういいから泣きたい。一人で泣きたいだつてば。だからほつとけ――！

と、いうことをもちろん最後の三行は胸の内にしまったが、簡単に話した。

ため息混じりに、視線をグラスから聞き手の女性に向けると

恐ろしく真面目に自分を見ていることに驚き目を反らした。

そして、まじまじとボクの目を見て

「あはははアンタ、ばっかじゃねえの？」

「へ？」

聞こえた言葉が予想外というか、初めて聞く言葉でもありボクは固まった。

その様子をまるで面白がるかのように女性はゴメンゴメンと自分の肩を叩いてくる。

「もう、いいですよ！ ごめっくり」

ため息混じりに語尾を荒げて席を立とうと決心した、その時だった。

「別に良いけど、彼女を悪者にするのだけはやめなさいよ。」

聞いていると他人のせいに思いはじめてるでしょ？」

「・・・・・・・・」

「あははわっかりやすい！！ え、うそおやだ耳まで赤くしちゃって」

(くそっ)

内心でボクは、泣きたかったというか泣いていた。

気持ちを見事に酔っぱらいに射抜かれ、驚き固まったところを弄られるという男と

しては大変恥ずかしい状況にボクは陥っているのだ。

気が付くとボクは座って、カクテルを一気に飲み干していた。

隣で彼女が小さく拍手する。

「もうお願いですから、勘弁してください」

ぺこぺこ頭を下げながら彼女に懇願する。

顔を上げて彼女の顔を見るとかすんで見えたので目を擦ると、液体が指に付いていた。

いつの間にか泣いていたらしい。

飲み屋で、しかも偶然会った女性にここまで揺さぶられることに

自分はなんと情けないのだろうと胸が焼け焦げそうなくらい辛かった。

こんな辛い夜は初めてだった。

明日からは、想いを馳せていた彼女とは同僚ではなくたんなる親友の彼女となる。

それをボクは、温かい目で見守ってやる。その覚悟を持ちたかった夜でもあったのに。

・・・・・・・・・・

「モスコミュニケーションください」

親友が好きなカクテル。それを同僚の彼女に教えたら、

会社の集まりや親友と三人での飲み会でも彼女はそれを頼むようになった。

本当はそれもあって、嫌いになったカクテルなのについてのまにか頼んでいる。

そんな自分が、もう信じられない。

彼女が好きになった、それも自分が紹介したカクテルを飲んでいる。

それを反芻していると、涙が自然と溢れた。

「お待たせ致しました。どうぞモスコミュニケーションです」

優雅な物腰で空いたグラスと入れ替わりに、赤銅色のグラスを置く。

「だからさあ、被害者って顔すんなっていったんの!？」

「あのさあ貴女に関係ないでしょ！」

「それが関係あんのよ」

ボクは、つい大声で彼女に視線を送り際に言った。

後々省みて、酔っていたとかたづける。

「なにがあるんですかあああ!！」

大声にも、動ぜず女性はじっとこちらを見つめて呟いた。

「あんたに惚れたのよ。ここに通ってるあんたを見ててさ。

同僚の女が好きな癖に友達に肩もたせている不器用

なお前にいい」

人差し指をボクの額に押しつけて、ぎりぎりど爪で刺しながら呟く。

「いつて! ……!？」

人差し指を払いのけて、しかめた顔を上げて見た彼女表情を見て、ボクは絶句した。

鼻をすすりつつ、目を赤くして涙を流していた。

グラスを持つ手が震えているのが印象的だった。

「どうしたんですか？」

首をかしげて、尋ねると彼女は引きつった笑みを浮かべて呟く。

「あ、あのさあ。わかるかな・・・あたし不器用なんだよ。

それで、アンタも不器用みたい・・・じゃん？」

「はあ」

確実に自分の肺腑を抉られる気分だったが堪え忍ぶ。

「試しに付き合ってみない？ 似たもの同士うまくいくと思うんだけどな」

ボクはうーん、と唸りながらカクテルを一気に飲み干した。

だが酔いで鈍くなった思考では、わざとらしいその間も役に立たない。

そう思ったとき、気が付くとボクは頷いていた。

「実験期間が付きますけど、それでもよければ」

ハンカチで口元を抑え、鼻をすすりながら彼女は応える。

「馬鹿、わかりずらいんだよっ」

ボクの椅子を軽く蹴って赤面しているその女性の瞳は、

とても綺麗で真っ直ぐとボクだけを見ていたとその時初めて気づいた。

．．．．．

ガチャ

カランカラン．．．．．

「ありがとうございます。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。

是非今度はお二人でいらしてください」

．．．．．

- 閉店間際 -

「眠いなあ」

「そりゃ開店から閉店までカウンターで飲んでりゃそうなるわよ

お尻痛くならない？」

「皮が厚いのあたし」

「はいはいわかったわかった」

「何度も言っけどあたし始めてみた」

「なにが？」

「恋人になる瞬間」

ひかりは苦笑しながら、悪友のさおりにカクテルを差し出す。

さおりは、赤いそのカクテルを面白そうに眺めた。

「なに、毒入ってないよ？ さおりの言ったとおりあの二人をテーマに作っただけ」

自分用にストックしておいた、オリーブをつまみながらひかりは
呟く。

ひかりは片づけと、明日の簡単な仕込みにかかっており

手元はとんでもない早さで動いていた。

酔っている客がそれをじっと見ているとめまいをおこすらしい。

さおりは少しの間斜に構えて、カクテルを観察していたがやがて

頬杖を付いて一口、口にすると誰もいない正面をじっと見たまま口を開いた。

「なんて名前のカクテル？」

手元を止めず、ひかるは答える。

「メイフォア」

「へー」

「梅酒がベースなの。梅酒好きだったわよね」

さおりは視線は変えずこくと頷いて、ピースサインをつくる。

彼女らしくない反応に、ひかりは興味をそそられて、

「なになに、どうしたの？ あの手たりにあてられた？」

眉間に皺を寄せて呟くとさおりは冷笑を浮かべながら、

いつのまにか紅く潤んだ瞳をひかりに向けて呟く。

「年上の女が好きって男、どう思う?」

「うーん・・・器が出かけりゃいいんじゃない?」

「そうだよねえ。年上とか言ってたって女は男に頼りたい生き物だもんね。」

結局されるよりはそうなのよ。だからさ

よっぽど思いやりがないとさ・・・」

「・・・・・・・・」

ひかりはふーん、意味ありげにさおりを観察しながら呻くと

洗い立てのグラスを表に返し、

一度笑顔でさおりに一瞥してからあるカクテルを作って差し出す。

「どうぞ、アクセサリっていうの。サービスだよ」

「ん、ありがとう」

一口飲む。さおりは笑顔で言葉にはせず口の形でおいしいとあらわした。

ひかりはありがとう、とこくと頷いて、傍らに置いている水を一口飲んでから、呟いた。

< ねえ、聞こえる？ 気づいてる？ >

< 私の心鳴が >

< 貴方の寝顔を背にすすり泣く音でもいい >

< 貴方の発する言葉一つ一つに私は心を傾けていることに >

< そんなわたしに貴方は少しでも感じていただいていますか？ >

< それがいつか通じるように、私はただひたすら祈っています >

< それでも涙が溢れるのは、一番通じる貴方へのサインなんだろうけど >

< 見せる勇気が沸かないことを許してください >

「・・・・・・・・」

「なんか・・・ぐさつと来るね」

「うん、最初泣けた」

「けどひかりは人前で泣かないよね？ 強いよ」

小首をかしげて、いつの間にか流している大粒の涙を振り払うこともなくさおりは尋ねた。

その仕草に、かおりは目頭が熱くなっただが踏みとどまり微笑ん

で答える。

「強くはないよ。臆病すぎるんだよ、自分を人に見せた後に聞く言葉があたしは怖い。」

でも昔のことに未練とか、故意に避けていることがあるわけじゃないのよ。

別に過去の人を想っただけならいいとおもうし、

ただ悩みを抱えて前に進めなくなるくらいなら、そんなのないほうがましだとおもうけど」

「・・・そつか。ごめんね思い出させて」

「いやいいよ。こっちこそ聞いてくれてありがとう」

そのあと、二人はお互いの事を口に出すことはなかった。

それでも夜はマイペースに時の上を流れ落ち、朝と昼がまた沈むのを待ち続ける。

自分の都合とは関係なく運命は不意に自分の前に道を開いてくる。

そこに向かうのは勇気だとか大げさなものは必要なく、遊び心が必要なのだとひかりは思った。

そしてまた、Barは様々な旅人の黄昏を待ち望みつつ眠りに
ついた。

END

カクテル3（後書き）

草食男子と片思いな女傑をテーマに書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4260y/>

ある田舎のBarにて

2011年11月17日18時37分発行